

## 録音資料を対象とした FRBR OPAC の構築

金子 希美

本研究は録音資料を対象とした FRBR OPAC の構築を試みる。録音資料には、ひとつの媒体に多数の作品が収録される、ひとつの作品に多数の責任性が存在する、同タイトルの作品が多数存在する、といった特徴が存在する。そのため利用者は媒体ごとでなく作品ごとの検索を行いたい、演奏者をアクセスポイントとして用いたい、といったニーズを持っている。しかし、現在の OPAC は媒体ごとに作成される書誌レコードに基づき構築されており、作品名、演奏者名の検索を行いたいと考えた時、その手がかりとなるのは内容注記のみとなることも多く、作品ごと、演奏者ごとに資料をグループ化して表示することは困難である。そこで本研究は FRBR に依拠した OPAC を構築することで録音資料に対する利用者ニーズを満たすことを目指した。

本研究では、日本目録規則に基づく JAPAN/MARC 書誌レコード(2009年3月分まで)から、録音資料である CD を対象として著作・表現形の抽出とグループ化を行う際の適切な方法を提案することである。海外の先行研究で提案されている、英米目録規則に基づく書誌レコードからの著作・表現形の抽出とグループ化の方法は単純には適用できない。また、録音資料に対する利用者ニーズを考慮した際には、日本の先行研究で提案されている書誌レコードの著作グループ化の方式よりも適した方式があると考えられる。

まず、著作・表現形のグループ化に必要な作曲家、曲タイトル、演奏者のデータの組を主に書誌レコードの責任表示と内容注記から抽出し、グループ化を行った。著作のグループ化の結果、最大 64 件の表現形を 1 つの著作であるとしてまとめることができた一方、一著作単一表現形となる著作は全著作の約 88% となった。また、表現形のグループ化においても最大 57 件の表現形を 1 つの著作であるとしてまとめることができた一方、一著作単一表現形となる著作が全体の約 89% となった。今後さらに著作・表現形の同定の精度を高めることが求められ、「書誌レコードの記述の一貫性」、「記号「◇」の抽出処理についてのさらなる検討」、「曲タイトルのさらなる分解」、「役割表示の利用」、「演奏者実体の定義の見直し」といった課題が挙げられる。

次に、グループ化した上記のデータに対する検索システムを構築した。試作した検索システムは、検索画面、著作表示、表現形表示、表現形表示、書誌詳細表示の順に画面遷移を行う方式とした。曲ごと、演奏者ごとにグループ化して表示することが可能であり、従来の検索画面、表現形表示、書誌詳細表示の順に画面遷移を行う OPAC に比べ、録音資料に対する利用者ニーズを満たしているといえる。一方、試作システムについても、「表現形に関する情報を用いた検索の実装」、「第 2 グループの実体からの検索の実装」、「著作・表現形の同定漏れを補完する仕組みの検討」といった課題が挙げられる。

(指導教員 谷口祥一)